てんぽのめがね

あきつ松風通信. 第186号
2023. 2. 26

Date 【使徒の働きの学び】(64)　　仁井 No. 勲

「主の支配と守りがある」(使徒 23:12-35)

「ユダヤ人たちは徒党を組み、パウロを殺すまでは食べたり飲んだりしない、と呪いをかけて誓った。----ところが、パウロの姉妹の息子がこの待ち伏せのことを耳にしたので、兵営に来てパウロに知らせた。---それから千人隊長は二人の百人隊長を呼び、「今夜9時、カイザリアに向けて出発できるように、歩兵200人、騎兵70人、槍兵200人を用意せよ」と命令した。----騎兵たちはカイザリアに到着すると、総督に手紙を手渡して、パウロを引き合わせた。」

今日学ぶ聖書箇所は、宣教、信仰の物語りと言うより、まるで戦記物のいちシーンのようです。「使徒の働き」の学びも28章の内23章まで来て、残すところ5章となりました。最初の頃には、ペテロの牢獄からの脱出は天使が現れて、ペテロを助け出しました。パウロの場合も、突然の地震によって、つながれていた鎖が解けた奇跡が起きた事が記されています。しかし後半の記事には、天使も地震など奇跡的なことは起きません。もっぱらユダヤ人の騒動、パウロへの迫害、ローマ軍の出動と保護、ローマ軍による護送など、政治がらみの事件の記事ばかりです。奇跡も天使も、神のことばも出て来ません。先回の説教で、終りに「主イエスが夜、パウロのそばに立って「勇気を出しなさい。あなたはエルサレムで、わたしのことを証ししたように、ローマでも証ししなければならない」と語られただけです。今日学ぶところは、議会とは別の、狂信的な「熱心党」のユダヤ人40人の刺客たちが、パウロ暗殺を企む陰謀が明らかにされます。ローマの千人隊長と軍隊によって兵営に保護されているパウロを祭司長やサドカイ派の協力で、彼を守る要塞から議場へ向わせる途中で待ち伏せし殺害しようとする計画で、40人もの一団(彼らは「シカリー」と呼れた暗殺団)がハンガー・ストライキまでしてパウロの命をねらっていた訳です。言わば絶体絶命の状況です。日本の戦国時代、天下統一を目指す織田信長が越前の朝倉氏を攻略した時、あらかじめ朝倉の盟友、浅井長政に妹の「お市」を嫁がせ身方にすることで万全を配して攻めこみました。ところが浅井氏は信長を裏切り、ひそかに朝倉方に付き、信長を背後から襲う企てをしていました。信長は絶体絶命の位置におかれたのです。一説に、長政の妻になった「お市」が、戦陣の兄に、小豆を袋に入れて送りました。信長は送られた小豆の袋が前後に両方が結ばれていた事から、勘の鋭い信長は、自分の窮地を悟り、単身そこから間道を一騎駆けで逃げ、脱出した話があります。

パウロに、その陰謀を知らせたのは、パウロ姉妹の息子、つまり彼の甥子が直接兵営に来てパウロに伝えました。今まで一度も聖書に出て来なかった、パウロの姉妹も甥も、突然現れました。この青年がキリスト者であったかも分りません。とにかく彼は命がけで、勇気をもって知らせたわけです。時にキリスト者が言いがちの「ありがとう、でも神さまが守ってくれているから心配はいらないよ」などとはパウロは言わず、それを信じ、彼をすぐ千人隊長の所に向わせ報告させました。実に冷静で正しい判断だったと思います。情報というものは常に直接伝達されるものでなければなりません。そんな常識(コモン・センス)が働くところにパウロの偉さがあると思います。すると物事はスムースに機能するのです。突然の現れは、いわば天使の出現と同じで、パウロにとっては奇跡なのです。40人の刺客の待ち伏せに対し、千人隊長は、二人の部隊長を選び、歩兵2百、騎兵70、槍兵2百、計470の兵力を動員させました。優に砦を攻略するほどの部隊をいち

ローマ市民であるパウロの救出のために使ったのです。私たちは聖書を読むと、昔イスラエルの預言者エリシヤの時代、隣国シリアの大軍がエリシヤの住む町を包囲した時、朝早く起きそれを見て恐れた若者に、エリシヤは、「恐れることはない、我々と共にいる者は、彼らと共にいる者よりも多いのだ」と言い、祈って若者の霊の目を開かれると「火の車と戦車がエリシヤの周りに立っているのが見えた。」。パウロの甥は、彼らの陰謀を盗み聞きしたとき、恐れおののいて兵営に駆け込んだことでしょう。しかし、パウロと共にいる者は、彼らと共にいる40人より遥かに多い470人の当時世界最強のローマ正規軍だったわけです。そういう風に読むと聖書は実に面白い書物です。私たちは聖書は、聖なる信仰の書だと思っています。もともと聖書は「ビブロス」と言い、「本」"The Book"と云う意味でした。聖書には、「神さま」も「信仰」と云うことばも出てこない書がいくつもあります。「エステル記」などその例です。ペルシヤに捕囚されたユダヤ人の物語です。ペルシヤ王の妃に選ばれたエステルは、大臣のハマンの陰謀によって、民族絶滅の危機に立たされます。その企てを知ったエステルは、それを王に告げるか否か悩みます。そのとき親代りのモルデカイがこう言います。「あなたは王宮にいるから難を免れると思ってはならない。あなたがこの国の王妃になったのは、このような時のためでなかったと誰が知りましょう」。それによって、死をかけて王に直言したことで、ハマンの企は潰えてイスラエル人は救われました。神ということばはなくても、人から出た言葉も神のことばだったのです。この「使徒の働き」の後半のパウロの事を書いたルカは、天使や奇跡的な神の業を、むしろその時代のローマ軍、ローマの政治家やローマの制度など、世俗的な働きの中にかくれて働かれる神の保護と守りについて書こうとしているのではないかと思われます。

カトリック教会では、昔から人は生れたときから各々守護天使がついていると云う教えがあります。私たちキリスト信徒には特別な神さまのみ守りがあると信じていますし、何かのときそれを期待してもいます。しかし現実にはそのような事は起りません。最近映画にもなった、戦後の小説の中でも傑作の一つと思う遠藤周作の「沈黙」があります。彼はカトリック信徒でありますが、キリスト者が最も神の保護と助けが必要なときに、神は沈黙されて、現実には何の奇跡も起らなかったと云う事をキリシタンの迫害史を通して示した小説でした。神は沈黙されているようで、実は信仰的には無関係と思われる人々を通して働いておられる。詩篇110篇（メシア詩篇と呼れている）の2節に「主はあなたの杖をシオンから伸ばされる。『あなたの敵のただ中で治めよ』と。」書れている。救い主が神の右に座して支配されるとは、遠い抽象的なことではなく、「あなたの敵のまん中で」治められる支配とみ守りなのである。パウロが、彼が愛してやまないユダヤの民が敵となって、彼の命を取ろうとする現実の世界で、ほとんど会ったことがない甥っ子の青年が突然現われ、その青年の勇気ある密告を通して、また己れの義務感からか、あるいは出世のための動機からだったからかも分らないが、とにかくローマ軍人のモラルに忠実であったローマ軍人精神の権化とも言うべき千人隊長の決断の下にパウロは危機いっぱつ救出され、エルサレムから90キロ離れた先のカイザリアへ、その中間の町55キロのアンティパトリスまでは歩兵と槍兵にがっちり脇を護られ、そこから35キロ先のカイザリアへは、馬に乗せられ、70人の騎兵隊に守られ一気に、そのせまる危険から駆け抜けたのであった。これは正に主イエスが、「あなたは必ずローマでも私のために証しをしなければなりません」と仰せられた、主イエス・キリストが人を通して、ご自分の約束を果そうとされた奇跡と言わずして何んであろうか。